

庄司俊作著

『格差・貧困の社会史』

大 森 弘 喜

I

現今のコロナ禍は我々にいろんなことを考えさせるが、本書のテーマとの関連では、非正規労働者の解雇と貧困もその一つである。有事の際に真っ先に犠牲になるのは、いつの世も決まって弱者である。今回も中小零細企業を中心に、あるいは業種で云うなら観光・運輸業や飲食業で働く派遣社員、非正規職員が職を失いつつある。コロナ禍が長引けば、顕在・潜在失業者の数は未曾有の規模になるだろう。持続可能な社会を目指すなら、法的な保護の埒外にあるこの非正規労働者を、社会のあるべき地位に復位させる必要があると思う。

さて、本書は我が国の労働者が、大正末から昭和五〇年までの時代に、社会的にどのような待遇をうけてきたかを、学歴との関連で跡づけたものである。これまでの近・現代日本経済史研究では、農民史、労働史、労働運

動史は豊富な蓄積があるが、一つ意外な見落としがあった。すなわちこれまでの歴史研究ではサラリーマンを真正面から扱ってこなかったという。ここに目を付けたのは本書の特長だろう。本書の構成は、次の通りである。

序章 不平等と序列社会を超えて

第一章 サラリーマンの登場と新身分社会

第二章 戦争と格差・貧困

第三章 戦後民主主義と高度経済成長の格差・貧困

序章で著者が主張するのは、「歴史の消尽点」としての高度経済成長である。つまり「歴史の到達点」として歴史をふりかえる『管制塔』が「歴史の消尽点」であり、これが高度経済成長なのだと言う。内容的に云えば、日本型雇用システムが確立するのが、高度経済成長期だということとは、本書で肯定的に語られる内容で、私も首肯できる。だが、コトバの問題として、「消尽点」にはすごい違和感を覚える。『広辞苑』でも『大辞林』でも、「消尽」は「すっかり使い果たすこと、消耗し尽くすこと」とある。高度経済成長期が「歴史の消尽点」というのは、戦前から綿々と続いた格差構造が、「すっかり消耗して消滅した」という意味なのだろうか。この表現は、著者の同僚、ドイツ史家の望田幸男氏からの借用らしいが、私にはしっくりこなかった。

またこの章の末尾にある「欧米化への流れ」には、冒頭に述べた私の心配が述べられているが、これが本書のメインテーマではないせいかな、なぜ一九九三年以降「非正規」がかくも増えたのが、詳しく追究されていない。誠に残念である。この点は最後にもう一度述べたい。

II

第一章「サラリーマンの登場と新身分社会」では、貧困・格差の今昔が語られて興味深い。昭和初期一九三〇年代には、労働者間の賃銀格差はかなり大きかったことが、王子製紙を例に引いて述べられる。職階による格差だけでなく、職員と職工との格差も凡そ三倍と大きかったのがこの時代の特徴だった。ここに著者は江戸時代からの身分制が残存していると云う。さらに男女間の格差も二倍程度と大きかった。

ところで、サラリーマンが登場するのは昭和初期らしいことが、原朗氏や岩瀬彰氏の仕事を根拠に語られる。原朗氏の「階級構成の新推計」では、一九三〇年時のわが国の就業人口は二九六二万人、うち「俸給生活者」が一五一万人、割合は五・一％である。量的に見ればいかにも小さいが、著者は、その賃銀が月収一〇〇円、年収一二〇〇円(現在の価値に換算して六〇〇万円)だったことが大事だという。この程度の収入があれば、都会で「人間らしい生活」ができるからであり、これがサラリーマン的価値観をつくったという。⁽¹⁾これだけで「サラリーマン的価値観」が確立したとは思えないが、ひとつの目標にはなったのかもしれない。著者は次いで、前田一氏の仕事に依拠して、月給一〇〇円サラリーマンの実態を探る。大手一流企業の初任給を示す表1-3は、著者

(1) 著者は、原朗氏の「階級構成の新推計」論文にある表1-1と2を、この本では「戦間期のサラリーマン」という表記で引用しているが、これは原著者に失礼であるし、この表1-2(著者は「図表」と一括に表現するが、図と表は区別すべきであろう)は、まさしく戦間期の階級構成全体を示すものであつて、サラリーマンだけを示すものではない。なお、岩瀬彰氏の著作は、『月給一〇〇円サラリーマンの時代』(講談社、二〇〇四)である。

(2) 前田一『サラリーマン物語』(東洋経済出版部 一九二八)

の云う学校歴による格差を如実に示して興味深い。旧帝大を頂点にした学校ヒエラルキーが見える。神戸高商や早稲田・慶応大学は帝大の八〇%、地方高商や中央大学などの私大は同七〇%、「中等程度、甲種商業」⁽³⁾は同四〇%である。そうしてこの学校歴賃銀格差は、サラリーマンだけではなく、工員などブルーカラーにもある。

昭和の初め、エリート・サラリーマンになるための条件は、云うまでもなく一流の大学を出ることだった。これを著者は「サラリーマンの費用対効果」という観点から眺めるが、その頃大学生の費用は、学費と下宿代などを加味して年間六〇〇円必要だったという。四年間で二四〇〇円、これを負担できるのは官僚なら奏任官クラス以上、農家では一〇町歩以上の大地主に限られた。普通の一〇〇円サラリーマンでは無理であったし、農民には夢のまた夢であった。大学を卒業して一流の企業に勤務すれば、一〇年もすれば役職につき、「中流階級」の間入りができたようだ。加えて、たつぷりとボーナスが支給され、さらに三万円から五万円の退職慰労金が支給されたという。中卒の場合、二五年勤めても月給は三〇〇〇円に届かなかつたというから、大変な格差が認められる。費用対効果の観点から云えば、四年間で二四〇〇円の投資で、生涯にわたり、その投資ができなかつた人の数十倍から数百倍の収入を得たと云えるようだ。これをどう考えるか、著者は自分の見解を明瞭には示していないが、私は、それはある程度経済合理性があると思う。ただ問題は、スタートラインが違い過ぎることである。親が高級官僚や大地主でなければ、経済的な理由から子弟が大学進学できないとしたら、余りにも不条理であり、また社会にとつても、有能な人間を有効利用できないとすれば、大きな損失でもあろう。出自の違いがその後の人生を決定づける環境は好ましくない。戦後改革はこの制度的障碍をかかなりの程度除去できたのであり、私は戦後復興や高度経済成長も、その賜物であると思う。もう一つの問題は学歴による賃銀格差が大きすぎるこ

とである。この点が次に述べられる。

エリート・サラリーマンの対極にあるのは職工であった。第一次大戦後わが国の重工業化の進展で、職工はかなり増加したが、その待遇は劣悪だった。日立製作所を例にとれば、職工の賃銀は職員のその二分の一から、年齢と共に差が拡がり、四〇歳では四分の一から六分の一であった。しかも工場への出入り口も別など、露骨な差別があったという。著者は、職工は「よそ者」扱いだったという。

もう一つ「よそ者」の典型は女工だった。細井和喜蔵の妻、高井としをの軌跡に、大正から昭和前期にかけての日本の女性労働者の悲惨さが滲み出ている。⁽⁴⁾ 彼女は一九一三(大正二)年一〇歳五か月のとき募集人の甘言に乗ってある会社の紡績女工になるが、「見ると聞くとは大違い」で、実際には給料から食費を引かれると、手許にはほとんど残らなかった。そこで転職を繰り返すことになる。奈良県、岐阜県、名古屋の紡績会社、さらに東京に出て深川や亀戸のモスリン工場に勤め、そこも思うように稼げないのでカフェの女給になる。細井和喜蔵と結婚し子どもをもうけるが、その子が亡くなると再び大阪に戻り、紡績工場に勤める。転職を繰り返すのは賃銀が余りにも安く食っていけないからである。昭和の初め、一流企業のサラリーマンが月給一〇〇円の時、男の職工は日給二円三三銭、紡績女工は一円二五銭(丁度男工の半分)、製糸女工はもつと安く九三銭であった。紡

(3) 「中等程度、甲種商業」は何か、ぜひ注記されたい。ところで、著者はこれらの差異を無視して「初任給はだいたい八〇円前後です。」と云うが、右に見た通り著しい格差がある。

(4) 高井としを『わたしの「女工哀史」』(岩波文庫 二〇一五)

績女工、高井としをの賃銀は、サラリーマンの賃銀の僅か三・五%でしかない。女工の悲惨な運命は、製糸女工の結核罹患と死亡に象徴されるだろう。長い労働時間、埃の多い労働現場、不自由な寄宿舎生活と低栄養の食事、結核罹患による強制解雇と実家への送り返し、そこでの隔離生活と絶望、そして死。

職工と女工のこのような悲惨な境遇は、彼らが「よそ者」だったからだと著者は云うが、この呼称は私にはしっくりこない。同じ日本人なのに劣悪な労働条件をおしつけるのは、企業経営者にとつては、職工や女工は奴隷や農奴でしかなかったからだろう。「よそ者」というより「使い捨て労働力」だったと思う。学生時代に読んだ山田盛太郎『日本資本主義分析』に書かれていた「インド以下の賃銀」を思い起した。

戦前日本のこの低賃銀を規定したのは、地主制下の農民の貧困であった。五〇町歩以上の大地主は一千人、地主の六〇%は五〜一〇町歩の中小地主であった。その年収は、一九二〇（大正九）年時、一六〇町歩以上の大地主一一六千円は別格として、七〜八町歩の中小地主で三〜四千円だったという⁽⁶⁾。他方、農民のそれは自作農四〇〇円、自作農三五〇円、小作農二五〇円だった。農民の経営規模は小さく、八四%の農民は一町歩以下、うち三反歩未満が二〇%を占めていた。この収入で一家五〜六人が食べてゆくのは難しく、農家の子どもたちは高等小学校を卒業すると、少年は工場勤めや商家などへの奉公に、少女は女工などに出て稼ぎ家に送金した。農家の大人たちも、日雇や馬車引きなどさまざまな仕事で賃銀を稼いだことが、岡山県南部の例で示される。やがて、経済の発展につれて農業外の産業が雇用を作り出す。「小作農よりも人力車夫の方が稼げる」といった状況が現れて、「農業が不利化」（この表現も私にはなじめないが）する。著者がここで云いたいのは、こうした状況下で農家の子弟が上級学校へ進学するのは、夢のまた夢であったということである。まさしく「おしん」の世界

である。

III

第二章「戦争と格差・貧困」では、今までの常識と違って、戦時下には戦後改革を準備するような動きがあったことが語られる。安岡章太郎の回顧談を引いて、都市には中産層が形成されて窮乏化する農村と際立った格差が生じたという。しかしその農村部でも、昭和恐慌の影響を強く受けた東北地方や養蚕地帯の長野・群馬地方と、近畿・東海地方とではだいぶ事情が違うという。一九三二（昭和六）年に東北・北海道を襲った冷害により、農民は困窮し、多くの若者が出稼ぎに出る一方、娘の身売りが横行した。養蚕地帯の長野・群馬では、世界恐慌の影響をもろにうけて繭価格が六〇%も暴落したので、これに依存していた農家は困窮したのである。その苦境を、ある農村青年は次のように記した。「俺達農民は全日本八千万の民を養っている。だのに俺達は餓えて

(5) 職工や女工を「よそ者」と規定したのは、著者によれば、菅山真次『就社社会』の誕生（東大出版会、二〇一
一）である。

(6) 著者は一つの文章のなかで「〇・三町歩」と記したり、「八反歩」と記すが、統一的に「〇・三町歩」は「三反歩」と記すのが、読者には親切だと思う。また、若い読者には、旧い度量衡を現代のそれに換算して表記するのが親切ではなからうか。

(7) 安岡章太郎の著作は本文では『私の昭和史』だが、文末文献リストでは正しく『僕の昭和史』（講談社、一九八四）となっている。細部にも注意が必要である。

いるのだ。ひもじい。コメの飯が食えないのだ。麦五合に米五合の黒い飯、一週間に三日は必ずオミイ（米と麦と野菜を混ぜてドロドロに煮たもの）を食う。……こんな矛盾した世の中を誰が造り出したんだ。」

他方、近畿・東海地方の農民は、野菜や果樹栽培、酪農・畜産など経営多角化と、農外の就労機会の増加で難局を乗り切れたという。

戦時下においても、都市サラリーマンは恵まれた生活を送れるだけの収入があつたという。一九三九（昭和一四）年から四四年の期間に、エリート・サラリーマンは二・六倍の収入増、普通のサラリーマンでも二・四倍も収入が増えていた。そして、注目すべきは統制経済のもとで、政府が労使関係に介入し、賃銀水準などを指導監督するようになる。年齢と勤務年数に応じた年功賃銀制が、大企業に定着してくる。これまで否定的に捉えられた産業報国会運動も、著者によれば、勤労者を「人格的主体」として認める転機となつたと、肯定的に捉えている。

賃銀が増えて生活が楽になつたのはサラリーマンだけではなかつた。工場労働者や農民もこの時期生活が裕になつたという。その事例を著者は東京大田区の町工場について見る。折からの軍需で、この界隈には機械・金属加工の町工場が蝟集し、労働者も五〜六倍に増えた。そしてその賃銀も目立って改善された。普通の労働者が月収一五〇〜一八〇円、熟練工になると二七〇円にもなつた。これは先述の普通のサラリーマンと同水準であり、小学校の教員や区の職員よりも高額になつたので、彼らから不満の声があがつたという。彼らの羽振りの良さを示す証言が、小関智弘『大森界隈職人往来』（朝日新聞社、一九八一）に収められている。町工場の熟練工たちは肩で風を切つて街中を歩くようになった、昼日中から芸者を工場に連れ込んでドンチャン騒ぎをした、工場近

辺には百軒もの料理屋ができ、二、三〇〇人の芸者がいたという。

他方、農民の経済状態も改善されたという。著者は岡山の自作農上層と新潟の小作農を紹介している。岡山の自作農は田を一町歩二反、畑一反二畝、山林一〇町歩を経営し、戦前の一〇年間で収入が三倍増になり、かなりの蓄積ができた。他方、新潟の小作農、西山家は水田二町歩一反を地主から借りて小作経営していた。これも戦前の一〇年間で収入は二倍半になり、仲買商などの稼ぎもあつて、それなりの蓄えができたようだという。ところが、この家の跡取り西山光一は、その日記のなかで「小作農民の惨めさをしみじみ感じた」と述べている。⁽⁸⁾

私はこの節を読んでいぶん混乱した。岡山の自作農はかなりの規模の田畑を経営し、山林からの収入もあり、ゆたかであることは論を俟たない。でもこれは日本の平均的農民からは程遠い。他方、新潟の西山家は、典型的な小作農とみてよいのか。小作地の水田二町歩一反は、平均よりかなり大きいのではないか。西山家の小作料率がいかほどになるのか、記されていないので、西山光一の云う「小作農の惨めさ」がいま一つピンと来ない。前述したが、農民の八四％は一町歩未満の零細農民だが、この貧農層もゆたかになったのだろうか。

農民のゆたかさを証明するもう一つの事例は、淡路島の農民である。大内力「村にて―農村現地報告」(一九四三)によれば淡路島三原郡の農民は、自然条件にも地理的条件にも恵まれ、米と麦、後にはタマネギ栽培、乳牛飼育などで利益を上げたという。どこの家も屋根瓦が本葺きで、長屋門をもつ立派な家が多かったという。⁽⁹⁾次に、これも農民のゆたかさを示す事例か、千葉県我孫子の農民が紹介される。⁽¹⁰⁾夫は兼業農家で近くの工場に勤め

(8) これがよく引用される、西田美昭・久保保夫『西山光一日記』(東京大学出版会、一九九二)である。

にでていたが、一九三四（昭和九）年ころから妻が東京に野菜行商に出かけ、最初は年末一ヵ月だけ、後には早春と夏季にも一ヵ月行商し、かなりの現金収入を得たという。

右に述べた、工場労働者や農民の地位向上と経済状況の改善を、都市中間層は苦々しく見ていたことが、清沢冽『暗黒日記』（東洋経済新報社、一九五四）などに基づいて語られる。闇商売などで稼いだ農民や羽振りの良くなった職工が、二等車にドヤドヤと乗り込んできたり、馴染みの大工や植木屋が、勝手口ではなく玄関から入ってきたり、女中のなり手が少なくなり、長谷川如是閑氏は七〇歳にして初めて自分で米を炊いたとか、等のエピソードが面白い。しかし、中間層にとってみれば、これは身分秩序崩壊の兆しと思われたらしく、やや大袈裟に「革命的状况」と表現したようである。

太平洋戦争前の右に見た庶民の地位向上は、私には実に新鮮で驚きでもあったし、中間層の危機意識もそれなりによく分かる。著者が、自信を込めて「今までの歴史認識に修正を迫る」と語る、この変化は本当だろうか。私にはいまひとつ納得できなかつた。著者は、もう少し基本的な事柄を考察する必要があるのではないか、と思われる。その一つは、戦時下の労働力市場がどうなっていたかである。この時期、青壮年男子は徴兵に取られて、生産的労働力はかなり枯渇していたのではないか。それが軍需工業など現業部門の賃銀を押し上げたのではないか。また若い女子労働力も軍需工場などへ徴用にとられたために、例えば、女中のなり手がなくなつたという現象が生じたのではないか。賃銀変動は労働力市場の需給関係に規定されるのだから、このあたりの事情はもっと掘り下げて考究されるべきではないかと思う。

もう一つの疑問は、右の農民層の富裕化は普遍的だったのか、である。淡路島の農民など、自然条件や地理的

条件に恵まれた地域の農民がゆたかになったのは、よく理解できるが、地主制のくびき下にある零細小作農民、農民の八〇%余を占めた零細農民もゆたかになったのだろうか。小作料率の引き下げは起こったのか、農業以外の就労機会が増えたのか、こういった点を語る必要があるように思う。

IV

第三章「戦後民主主義と高度経済成長の格差・貧困」では、冒頭で、戦後に結成された労働組合をリードしたのは、エリート・サラリーマンであったこと、組合は職員と工員とが加入する混合組合であったことなどが、城山三郎『官僚たちの夏』や金子兜太『語る兜太』などに依拠して語られる。また、身分制の強かった日立製作所でも、身分制の廃止、年齢を重視した生活給の導入がはかられたという。敗戦と戦後民主主義の思潮のおかげで、国民の間に身分制的残滓を取り除こうとする機運が高まっていたのである。

では賃銀格差はどうなったか、これを示すのが橋本健二『格差の戦後史』（河出書房、二〇一三）から引用した表3-1、表3-2である。⁽¹⁾これを本稿に転載する訳にはゆかないので要点だけを述べれば、次のようになる。

第一に、この二〇年間にどの階級も平均で一〇倍程度の年収増があったこと、つまり日本全体の勤労者がゆた

(9) 大内力作品からの引用で、農家副業としての「瓶筒」とは何か。辞書を引いてもこのコトバは見当たらない。註記が欲しい。また、「牛舎を引いて運搬業をやる」の「牛舎」^{ギエウシヤ}は、「牛車」^{ギウシヤ}の間違いか。

(10) 出典は増田実『増田実日記』Ⅲ（我孫子市教育委員会 一九九八）である。

かになったことが判る。

第二に、その増加率はより下位の階級ほど大きいこと。資本家階級は凡そ七倍、新中間階級は八〜九倍だが、労働者階級は平均一〇倍、自営業主では一〇倍、農民層では個人収入では一八倍、世帯年収では一二倍である。つまり格差が縮小し、所得の平準化が進行したと見られる。

第三に、労働者階級内部の変化では、大企業労働者の賃銀増加率は一〇倍だが、従業員二九人以下の零細企業の労働者のそれは一一倍余である。企業規模間の格差はいくぶん縮小したと云える。

この二〇年間の変化でとくに目を惹くのは、農民層の社会的地位の向上かもしれない。一九五五年には新中間階級の三八%、労働者階級の五五%でしかなかった年収が、七五年には同七〇%。九八%にまで改善されたのである。また若者の貧困層に占める、農民の若者が、五五年には六三%と群を抜いて高かったが、七五年には二四%に激減したのである。

農民の社会的地位向上と関連して、「ものいう農民」の登場が語られる。その代表は、無着成恭の「やまびこ学校」の卒業生、佐藤藤三郎である。他には、星寛治、斎藤たきち、木村廸夫、そして佐賀の山下惣一などがいるが、かれらに共通するのは、戦後の民主主義的学校教育をうけたこと、向学心旺盛ながら親の反対や経済的事情で大学進学できなかつたこと、その旺盛な探求心と行動力で農業や農村の近代化に邁進したこと、広く社会問題にも発信を続けたことなどである。「ものいう農民」たちが中学を卒業するのはだいたい一九五〇年代初頃だが、まだ高度経済成長は始まっていなかった。それゆえ、農民の大部分は貧窮のなかにあり、佐藤藤三郎や山下惣一のように優秀で向学心ある青少年でも、大学進学はおろか、高校進学ですら困難な状況にあった。加え

て、彼らの親たちは「農民に教育は要らない」と考えていたのである。

こうした状況が大きく変わるのは、一九六〇(昭和三五)年以後、高度経済成長の余滴が庶民にまで及んでからのことである。表3-7によれば、高校進学率は一九五〇年が男女平均で四二%だったのが、六〇年に五八%、七〇年に八二%に達する。短大を含む大学進学率は、(五〇年にはデータがなく)五五年に一〇%、六〇年も一〇%だったものが、六五年一七%、七〇年二四%、七五年三八%に達する。だがその後停滞し、九〇年には三六%と僅かだが低下している。

一定の学力があり意欲があれば、経済的条件に関係なく大学進学できる、「大学の大衆化」が実現した。経済成長の恩恵が庶民にまで及び、子弟を上級学校へ進学させる余裕が生じたのである。他方で、物価上昇率と比較して国立大学の授業料が格安だったことも幸いした。著者も(そして私自身も)経験したのだが、国立大学の授業料は年間一二千円だったし、慶應大学や早稲田大学でも一九五八年は三万円であった。著者が云うように、この当時は「国も国民の教育にはやさしい時代だった。」のかもしれない。戦後の民主主義教育と高度経済成長のお蔭で、個人の意思と努力で己の人生設計ができるようになったのは、私も同感である。自助を支援する公助があった時代だと思う。

(11) 表3-1「階級別年収格差」では、資本家階級、新中間階級、労働者階級、自営業主層、農民層の五つの階級の、一九五五年と七五年の個人年収額と世帯年収額が表示される。表3-2は、労働者階級、自営業主層、農民層の他の階級との相対比較が表示されている。

最後に、「中卒・高卒の生活史」が、新潟の農村中学校の一九六二（昭和三七）年卒業生の軌跡を引いて語られる。¹²この三年B組の卒業生は男二五人、女二四人だが、全日制高校に進学したもの一八名、大学進学者は四名でしかない。それぞれの進路が克明に記されるが、全体的な特徴を云うなら、農業に従事した者は男一名、女二名と少ない。著者は、若者には「嫌農」、つまり農業を嫌う傾向が強かったせいだという。男子ではサラリーマンなど会社員になるものが目立ち、女子では会社員の妻になるケースが多い。高卒で会社員になった男子は、必死の頑張りでそれなりの地位につき、幸せな家庭生活を送っている。女子は必ずしも自分の希望が叶えられなかったようだという。つまり高校進学を希望しながら、親の反対で実現できなかったものが何人もいる。それでも「会社員の妻になる」という夢を叶えたようだ。

もう一つの特徴は県外在住者が一一人いることである。著者はその数は少ないと云うが、二〇%もの県外在住者は決して少なくないだろう。個別の履歴を見ると、その多くが高卒後、大きな夢を抱いて東京などに出て懸命に会社勤めをしている。彼らが日本の高度経済成長を作り出したのである。

V

本書は大正時代から昭和中期まで、労働者の処遇がどのように変化したのかを、賃銀格差に焦点を当てて叙述したものである。著者の結論は、戦後の高度経済成長により日本型雇用システムが確立したこと、その特徴は、年功序列、終身雇用、企業別労働組合、新卒一括採用などであること、但し、それは学校歴差別、年齢差別、男女差別をもっている、というものだった。本書を読んで納得したことの一つは、この「学校歴差別」という見方

である。確かに、学歴差別をもう少し注意深く眺めれば、その核に大学における「学校歴差別」がある。そして本書では戦前の階級間の格差が、高度経済成長によりかなりの程度解消されたと肯定的に捉えていることである。著者は(私も)、普通の農家の子もだったが、そのお蔭で高等教育を受けられ、自分の好きな職業に就くことができたのである。著者が序章で記した「歴史の消尽点」というのは、このことだろうか。

本書の長所は、経済史の専門書だけでなく、広く文学作品や読み物などを駆使して、時代状況を浮かび上げさせたことである。小関智弘『大森界限職人往来』、清沢冽『暗黒日記』、安岡章太郎『僕の昭和史』、加太こうじ『ふたりの昭和史』、『増田実日記』などからの引用は、たいそう面白かった。

その上で幾つか注目を云いたい。その一つは、注記を設けて欲しかった。出典については、本文中に()付きで略記されているが、内容註はない。講演記録をもとに執筆したというが、本にするときには内容註も欲しい。次に、年号表記の仕方が西暦と元号が混在していることである。私はこの書評では西暦(和暦)と記したが、この点の配慮が必要であろう。もう一つは注記したが、誤植・変換ミスが目についた。名言(明言)、史学(私学)など。

最後に内容的な注文を云えば、現在の「格差・貧困」についても、もう少し言及して欲しかった。一九九三

(12) 出典は箕輪紀子『新潟発 団塊の世代史』(越書房、一九九五)である。

(13) 著者は、「こうした枠組みと条件があつて(大学進学)が可能になったことを、私は原体験のある当事者として名
言します。」(一五六頁)と述べている。「名言」は「明言」の誤植だと思う。

(平成五) 年以降、非正規労働者が増加し、賃銀が低く抑えられた結果、いわゆるワーキング・プアが恐ろしい勢いで増えている。二〇一八年現在、年収二〇〇万円以下の労働者が一六〇三万人に達した。経済的な理由で結婚できない若者が増えている。これこそ現代的貧困の象徴であり、日本社会を沈滞させる大きな要因であろう。社会保障費を負担できない非正規・低賃銀労働者、反対に生活保護などの受給者が増える懸念、経済にとつては大衆購買力の停滞・減少などが、現に起きている。著者にはこのような「現代的貧困と格差」を、続編として書いて貰いたい。

(二〇二〇年十二月十四日 脱稿)

(庄司俊作著『格差・貧困の社会史』 クロスカルチャー出版 二〇二〇年 一七九頁 二〇〇〇円+税)